

『教頭職に思う 1』

「校長は、教頭候補の発掘や育成に努めて！」というお達しがいつ頃出されたのかは定かではありませんが、おそらく自分がいわゆる教頭試験を受けた時（およそ20年前）もそうだったのだろうと推測します。

振り返りますと、40歳あたりから、当時の上司である教頭先生から「先生、少しいいですか」と声をかけられ、別室にて「管理職にならないか？」というお話を頂くのです。私としては管理職になるつもりは微塵もなかったのに「声をかけて頂いたのは有難いのですが」と断ってお断りしていました。時に「学校づくりは、管理職でなくてもできますので」と、大変生意気なことを言い添えたこともありました。今はつくづく「あの一言は、若気の至りだったなあ」と反省しています。

教頭先生のこのような動きは、当然校長先生からの指示が出ていたわけで、数年後、とうとう校長先生自らお話がありました（2月か3月頃です）。その校長先生のお話を聴き終わった時「まずい。断る理由が見つからない。もう逃げようがない」と思いました。翌日には、「来年度の教頭試験、受けます」と言っていました。

秋の教頭試験に向け、その町では勉強会がありました（6月下旬頃から）。町内各学校の校長先生が講師をされました。まずは筆記試験の対策を教えてくださいました。要は、論文（1200字）の書き方です。この段階で、私の頭は思考停止状態に陥りました。まず適切な言葉が思い浮かばない。そもそも論文というものをわかっていない。「では、試しに、出だしの10行（序論と言われています）書いてみましょう」と促されても1行も書けない。ほとんど参りました。論文対策研修の2回目（最終。7月下旬頃）は、「その場書き」です。当日テーマが提示され、そのことについて教頭としてどのように考えているかについて書くのです。本番と同様、2時間で。結果は、ボロボロ。自分の未熟さを痛感しました。なお現在の教頭試験には、筆記試験はありません。「受けやすくなるだろうけど、それでいいのかな？」とは思っています。苦行ではありましたが、テーマに正対して自分の考えを書くことで、ぼんやりしていた自分の考えが整理され、かつ明確になっていきます。そして、管理職としての課題把握力や課題解決力の素地づくりにやがてはつながっていくのではないかと捉えています。

このような状況でしたので、試験当日、「論題」を読んで考えながら1200字の文章を書くことは絶対に無理と判断。とりあえず「これだけは書いてくる！」という文章を事前に用意しておくしかありませんでした。それを暗記し、本番は思い起こして書くのです。夏休みに入ってから、文章作成に着手しました。何度も何度も読み返しては修正し完成したのは9月初め頃でした。そして、出だしの10行だけは、当日提示された「論題」に応じた文章を何とか書くという作戦で臨んだ次第です。結果は、おおよそ想定内のテーマだったので、用意した文章が使えたことは本当にラッキーでした。

筆記試験後は、面接試験に向けての勉強会がありました。担当された校長先生からは、とても分かりやすくかつ丁寧なご指導がありました。「そんな感じでいいんだ」と少し見通しが持てました。一連の勉強会で世話になった校長先生方には「感謝」の他言葉が見つかりません。一方で、何となく自分がこれまでとは違う世界に踏み込んでいっているような恐れに似た感覚もありました。

翌年の2月頃、当時の校長先生から「おめでとう」と言われました。私は「この学校でもう1年仕事がしたいので、是非登録残をお願いします」とお伝えしたところ、「わかりました。教育長にそのように私からもお願いしようと思います」と返答され、結果そのようになりました。ところが、世の中一寸先は何とやらで、その年の6月1日付けで、とある小学校の教頭として異動することになりました。いわゆる年度途中での人事異動です。私は、この時初めて「登録残」の意味を理解しました。いつでもお呼びがかかる立場なのだと。

今でも忘れません。5月15日のことでした。まずは、当時の教頭先生から「先生、校長室に行こう」と言われ後をついて行きました。教頭先生が校長室の戸をノックし「連れて参りました」と言って、私に入室を促しました。校長室に入ると、何と、教頭先生は校長室に入らずに戸を閉めてしまいました。てっきり、教頭先生も一緒に入られると思っていたので、この時点で、何か変だぞという違和感を覚えました。そして、さらなる異変を感じました。ソファに座っていた校長先生の表情が険しいのです。普段は、とても温厚で、職員との接し方も極めて紳士的な方でしたので、私は思わず「自分が何かして怒られるのか」とたじろぎました。とんと心当たりはなかったのですがつい怯んでしまいました。

その後、「先ほど、教育長から、6月1日付で〇〇町立〇〇小学校へ教頭として異動との内示を受けました」と校長先生から告げられました。反射的に私は「えー！」と声を張り上げてしまいました（これは校長先生に対して大変失礼な態度でした。これもまた反省）。全く想定外の事態。青天の霹靂ともいえる状況でした。恥ずかしながら、涙を浮かべていたと思います。

この時の校長先生からは、名刺入れを。私に管理職への道を選択させた、否、その道に導いた校長先生からは、印鑑を昇任祝いとして頂きました。有難いなと心から思いました。今でも大事に使わせてもらっています。

赴任前に勤務することになる学校の校長先生にご挨拶に伺いました。その後、教頭業務の引き継ぎ。冒頭「校長先生は、仏です。学校だよりは、私がほとんど書いていたかな」と。この一言は、サラッとでしたが、これから私の上司となる方の人柄や学校経営の一端を知る上で貴重な情報でした。教諭から教頭へ。職種の変化に伴う環境の激変とその厳しさや難しさが待ち受けていることを、この段階では、まだ知る由もありません。「行ってしまえば、何とかなる」が、私の信条。いや、この表現はかっこよすぎますね。口癖に訂正。要は考えが少々楽観的なのです。

結局今回は、私が教頭になるまでの経緯で終わってしまいました。続きはまたの機会に。たぶん、教頭1年目の様子が中心になろうかと思っています。